

司式: 増田多加子

奏楽: 吉田千鶴子

前奏: 「ノエル」

点火

招詞: 「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハ3:16)

賛美: 讚美歌 262 「聞け、天使の歌」

聖書朗読: ルカによる福音書 2:1-20

◆イエスの誕生

01 そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。02 これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。03 人々は皆、登録するためのおのおの自分の町へ旅立った。04 ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。05 身ごもっていた、いいなげの MARIA と一緒に登録するためである。06 ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、MARIA は月が満ちて、07 初めての子プロトコス(πρωτότοκος) [初子] cf. <モノゲネス(μονογενής) [独り子]7:12 他>を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

◆羊飼いと天使

08 その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。09 すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。10 天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。12 あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」13 すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

14 いと高きところには栄光、神にあれ、*Δόξα ἐν ὑψίστοις θεῶν* (ドクサ・エン・ヒプシストス) 地には平和、*καὶ ἐπὶ γῆς εἰρήνη* (カイ・エピ・ゲス・イレネ)

御心に適う人にあれ、*ἐν ἀνθρώποις εὐδοκίας*。(エン・アンソロ・ポイ・エウドキアス)

15 天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。16 そして急いで行って、MARIA とヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。17 その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。2:18 聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。19 しかし、MARIA はこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。20 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

祈禱

天の父なる神さま、あなたの聖名を賛美致します。御国が来ますように。一人ひとりの名を呼んで、ここに集めてくださり敬愛する兄弟姉妹と共に、このクリスマス・イブの礼拝に招かれましたこと、心から感謝致します。私たちは、今日、あなたの愛する独り子が、私たちのためにこの世に生まれ、私たちの兄弟となられたことを喜ぶために、ここに呼び集められました。

主イエスは私たちのために罪をその身に負ってください、私たちに救い赦してくださいました。その御子のご降誕の出来事を正しく受け止めることができますように私たちの心を開いてください。そして心をつなげて

祈ることができますように。

弱い私たちは、困難に立ち向かった時、そのことが神さまからの恵みであることに気づかず、神さまから離れて行きそうになります。私たちがどんなに苦しみの中にあっても、神さまがしっかりと繋ぎ止めてくださるということを、喜びをもって信じ祈ることができますように。神さまに従順でいられるようにと聖霊によって導いてください。

今日、様々な理由でこの場に集うことができない友のために祈ります。今この時に、勤務している友、病と闘っている友、老いの寂しさの中にある友、孤独の中にいる友、介護している友、様々な理由でこの時を覚えながらこの場に集うことができない友の上に、あなたの温かい慈しみがありますように。

このクリスマス・イブ礼拝が御言葉と祈りと歌と、この喜びに満ち溢れたものとなりますように。このお祈りを、ここに集う皆さまのお祈りと共に主イエス・キリストの聖名によって御前にお献げ致します。アーメン。

説教: 「喜びは驚きと共に」 大谷昌恵

私たち大人にとってクリスマスとは御子イエス・キリストのご降誕をまず思い浮かべますが、子供たちにとっては、何よりもサンタクロースとプレゼントの時と言えるでしょう。12月25日の朝、枕元にそっと置かれたプレゼントは驚きと喜びをもたらします。大きな喜びは驚きと共に私たちのもとにもたらされるのです。

福音書記者ルカは神の御子イエス・キリストの誕生を、ローマ皇帝アウグストゥスから全領土の住民に対して出された“住民登録をせよ”という勅令を記すことから始めています。ローマ皇帝はローマ帝国の統治者としての最高権力者であり、ローマ帝国を治める責任のすべてを負うた人でした。ローマ帝国に住む人々は皇帝に対して税金を納める義務があり、帝国の中に皇帝の認めていない王や別の支配者が居てはならず、皇帝は地上における最終かつ最高の支配者でありました。皇帝アウグストゥスは納税や兵役などの義務を課すために、ローマ帝国内に住む人々に住民登録を命じたのです。この住民登録は今現在住んでいる場所で行うことはできませんでした。自分が生まれた土地に赴くことが文書によって示されており、そのために人々の大移動が行われ、登録のために夫々自分の生まれた町へと旅立って行きました。

ヨセフも、この住民登録の勅令に従って、そのとき住んでいたガリラヤの町ナザレから、自分の血筋であるダビデの家の町であるユダヤのベツレヘムへ上って行きました。そして、そのベツレヘムに滞在している間に許嫁のMARIA は月が満ちて、初めての子である男の子を産んだのです。旧約聖書には“イスラエルの指導者であり救い主となる方はユダの地ベツレヘムに生まれる(ミカ5:1)”，という預言が書き記されています。その預言が成就するために皇帝アウグストゥスによる人口調査が行われ、それによってMARIA とヨセフはベツレヘムの地に滞在していたとも言えるでしょう。つまり、神は救い主イエス・キリストを誕生させるための手段の一つとして、皇帝アウグストゥスの勅令を利用しているのです。

ベツレヘムはエルサレムの南の方8*ほどのところにある町で、ダビデ王の出身地であったために再び支配者が出ると考えられていた町でした。“パンの家”という意味を持つベツレヘムは、天から下ってきた命のパンである御子イエスが生まれる場所として最も適した町とも言えます。ですか

ら、これは神のなさる業の驚きの一つと言ってもいいでしょう。

さて、この救い主誕生の知らせが世界で最初にもたらされたのは、「野宿をしながら、夜通し羊の番をしていた羊飼いたち」でした。かつて、イスラエルの伝説的な王ダビデが羊飼いであったことから分かるように、人々は元々羊飼という仕事に誇りを持っていたはずで、しかし、律法主義が強くなっていく中で、羊飼いたちは律法を守ることができない者たちであり、救いから最も遠い人だと思われるようになっていきました。羊飼いたちは牧草地や湧き水の出る場所に羊たちを放して栄養と水分を与え、野獣や羊泥棒から守るため、昼も夜も寝ずの番をして羊たちを守りました。羊は日常生活においては羊毛や皮や肉、乳などを得るものとして用いられ、宗教行事においては犠牲として^{いけにえ}献げられました。そんな羊飼いたちが主の日だからといって会堂へ行って礼拝できるわけもなく、「住民登録をせよ」という勅令に従うこともできない、謂わば、彼ら羊飼いはローマ帝国の支配下にあって人として登録されることもなく、寝る家もなく、動物と共に生活するしかない社会的に阻害された人々だったのです。その最も信仰心も無いと思われていたような羊飼いたちに「主の天使たちが近づき、主の栄光が辺りを照らしました」。

恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。

天使たちが、このように羊飼いたちに告げました。これは驚きと言っていいでしょう。民全体に与えられる大きな喜びが、最も信仰から遠い、人々から軽蔑されていた羊飼いたちに、まず最初に告げられたのです。このような喜びは、深い信仰を持ち日々礼拝を欠かさないような人たちに告げられるべきだと、私たちは考えがちです。しかしそうではありませんでした。そこには、まさに神の御心が働いたのです。

羊飼いたちに現れた天使は、最初は一人でしたが、「突然、天の大群が加わって神を賛美」します。救い主が誕生したという出来事は、数多くの天使たちが突然賛美しだすほどの大きな喜びなのであり、その喜びがどれほど大きなものであるかを天使たちは自分たちの歌声で示したのです。こうして天使たちから喜びの知らせを告げられた羊飼いたちはイエスに会いに出かけます。自分たちの生活の糧になる羊たち、それまでどんなことがあっても寝ずの番をしてまで守ってきた羊たちを置いて、羊飼いたちはイエスに会いに行く、これは2つ目の驚きです。“何よりも大切なものだと考えてきたもの以上にもっと大切なものがある”、羊飼いたちはそう感じとったのです。「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか。」そう話し合っただけで彼らは出かけて行きました。

天使たちが告げた「布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子」を探しに行ったのです。そして急いで行って、彼らはマリアとヨセフ、それに飼葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てました。「布にくるむ」(σπαργανώω) [「産着/おしめで」包む]新約用例 2(ルカ 2:7, 12)とは「産着にくるむ」ことです。出産後にこの産着を着せるまでに臍の緒を切り、水で洗い、油を塗り、塩で擦るといのが、この頃の一般的なお産の手順でした。イエスが生まれた時に「布にくるまれた」という出来事は、十字架での死の後も、“布にくるまれた” (έντυλιώσω) [「亜麻布で」包む]新約用例 3(マタイ 27:59, ルカ 23:53, ヨハ 20:7)]ということの思い起こさせます。そして、この「布でくられた乳飲み子」は、飼葉桶の中で眠っていました。飼葉桶とは家畜用の餌の入っている入れ物であり、家畜が使っているのですから決して清

潔とは言えないでしょう。しかし、そこは家畜にも人にも踏まれることのない安全な場所でした。乳飲み子イエスはそのような場所に寝かされていました。こうして、飼葉桶に寝かされた乳飲み子イエスと対面した「羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行きました。」このことが、驚きの三番目です。

羊飼いたちが見たもの、それは何だったのでしょうか。「布にくるまれ飼葉桶に寝かされた」赤ちゃんでした。“自分たちよりも貧しい、そして、確実に自分たちよりも弱い存在であるこの乳飲み子が救い主だ”というのです。誰がそのことを信じるのでしょうか？しかし、ローマ帝国下では、人として充分扱われることもない「羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰っていった」のです。信仰心がないと言われた羊飼いたちは、天使の話信じ、自分たちが見たことを信じて、神を賛美しました。

しかしこのことを羊飼いやから聞いた人々は、皆、不思議に思いました。普通の人々、謂わば、信仰心があると自惚れていた人々は、羊飼いの話を信じることもなく、ただ、「彼らの話を不思議に思いました。『不思議に思う』ということは、おそらく『信じなかった』ということ。主が救い主の誕生を羊飼いたちに知らせたのと同様に、羊飼いたちは人々に自分たちが知らされた内容を知らせました。社会的には何の力も持たず、人として認められることもない羊飼いたちが話した内容は、驚きである以上に、信じられないことでした。これがもっと社会的な地位がある人が話したのなら、あるいはまた、王の宮殿で見た事を話したのなら、人々は信じたかもしれません。しかし、話は全く正反対なのです。そんな羊飼いの話を一体誰が信じるのでしょうか。しかし、神はそのことをあらかじめ予測していたからこそ、真つ先に、羊飼いに御子の誕生を告げ、彼らを御子の降誕の証人としたのです。“この地に生きる誰よりも羊飼いたちを信じた”と言っていいでしょう。そして、社会は人として認めなかった羊飼いを神は人として認められたのです。

人々が羊飼いの話を受け入れられなかったのに対して、「これらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らした」人がいました。それはイエスの母となったマリアです。「思い巡らす」(σμβάλλω) [真の意義をつかむ、正しい意味を捉える]という言葉は、元々「断片を集めて、そこから大きなものを見つめる」という意味を持っています。受胎告知、ベツレヘムの旅、馬小屋での出産、見知らぬ羊飼いたちの訪問、それらに「思いめぐらせ」ても、決して楽しいことも、嬉しいことも思いうかべられそうにはありません。しかしマリアは、それらをつなぎ合わせて行った先にあるのは、“人の想いを遙かに超えた大きな神のご計画ではないか”と、ひとり、静かに思っていたのです。マリアは、かつて天使ガブリエルをとおして語られた神の言葉を受け入れ、今はこの世では人としての資格さえ持たないような羊飼いたちの言葉も受け入れ、その言葉の両方信じ、ひとり静かに、心にその言葉を止めて生きて行く決心をしたと言えます。その「マリアこそ最初の芯の信仰者」とも言えるでしょう。

クリスマス、それは、神が愛する独り子イエス・キリストをこの世へと送られた日です。私たちは、人間は神に背き数多い罪多い存在として生きてきました。しかし、その人間を見捨てるのではなく、神と人間とを和解させるために、イエスをこの世へお送りくださったのです。“救い主、主メシア”と呼ばれるほどの方であれば、立派な宮殿や、ふかふかのベッドが与えられてもおかしくないはずで、しかし神は、そうはならなかった。イエスを最も貧しく、最も低い場所に産まれさせてくださいました。その場所

こそが、全ての人間を救い得るに相応しい所だと神はお考えになったのです。これもまた、私たち人間には思いもつかないような驚きです。しかし、そのような場所にお生まれ下さったからこそ、イエスは羊飼いたちのような人々に卑しい人間だと思われていた人に、最初にその誕生が告げられ、その羊飼いたちに、喜びを分け与えてくださいました。その生涯の最後には、ご自分には全く罪がないのにも拘らず、人間の全ての罪を背負い、十字架に架かるという最も残酷な方法で死に臨んでくださいました。そうすることによって、イエスは神と人間とを和解させて下さったのです。生まれ落ちた時から、その運命が定められていたイエス、罪の塊である私たち人間の罪が赦され、神との和解が成されるという、これ以上ない大きな喜びは、多くの驚きと共にもたらされたのです。

私たちが日々過ごしているこの世の日常は、時に真っ暗闇とも思えることがあります。何の救いもなく、悲しみと痛みで支配された世の中に思える時があります。しかし、じっと目を凝らしてみましよう。静かに前を向いて、遠くの暗闇の中を見つめてみましよう。そして心の中で、神の御救いを祈ってみましよう。そうすれば、遠くに、かすかな小さな光が見えてきます。初めは小さな光かもしれませんが。しかしその光は次第に大きさと明るさを増し、私たちに希望と勇気と温かさをもたらしてくださいます。神は決して私たち人間を見捨てることはありません。なぜなら、大切な“独り子を与えてくださるほどに、私たちが愛してくださっている(ヨハ3:16)”からです。この世で生きて行くということは、楽しいこと、嬉しいことばかりではありません。辛いことや悲しいことも数多くあります。しかし、そのすべては、神のご計画によるものです。そのすべてのことから目を背けるのではなく、それら一つひとつの出来事を心に留め、大きな神の愛に心を向け、神を賛美して行くことができるようにと思います。喜びは、ただそれだけでは、私たちのもとにはやってきません。驚きと共にやってくるのです。天使が告げた賛美「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」この賛美を、心に留めつつ、御子のご降誕を共にお祝いしたいと思います。

ご一緒に祈りを合わせましよう。

神さま、あなたは愛する御子イエス・キリストを私たちのもとにお送りくださいました。その出来事は、大きな喜びであると同時に、この上ない喜びであります。どうか私たちが、その喜びの中を、光を目指して歩んでいけるように、これからもお導きください。このお祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの聖名をとおしてお献げ致します。アーメン。

賛美: 讃美歌 271「喜びは胸に」

献金: 感謝の祈り(海野美久)

御在天の父なる御神さま、尊い聖名を賛美致します。この聖なる夜に、主にある兄弟姉妹たちと共に礼拝に与り、イエス・キリストのご生誕を祝う恵みに心から感謝致します。

今、この世界には争いが絶えず多くの人々が心と体に痛みを抱えています。孤独や悲しみの中にある方、病床にある方、困難な状況に直面している方の上に、あなたの豊かな祝福と慰めがありますように。私たちが罪と悪の力が救い出し、希望の光で照らしお導きください。

私どもの献身のしるしをお献げ致します。献金を、どうか聖めて御用のために用いてください。主が教えてくださった主の祈りを共に祈り、

今日からの歩みを始めさせてください。

主の祈り

賛美: 讃美歌 264「きよしの夜」

祝祷: 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の豊かな交わりが、私たちの上にいつまでもありますように。アーメン。

後奏: 「ノエル」(A. ギルマン)